俳諧文庫 二十

17
へ 5
1139
17

上毛の國桐生新宿境野の里石井一庵
をとゝしの春ぬ月游ひきさりけるに
老のおもひ出とて予にかたりし家の系譜を
おほ給ひし雲ゐとかに八重の縁新しく
なりし九重のこゝやこゝに内をそんせし家
草屋を絶ゆましに初て西を合せしう
あてのましことのれとの事なりけるしる志
其人四季の時父母の世ちかく實家なる
井文化元年へ育られ某人の後その家を

時しらくありて津くもんゐてきたるおこなひ
ゑまるりまた文政甲申の秋八月はしめを
川の洪水りあふれて家財田畑ことことく
失ひ危命を助りて世わしとなかる
桐生の古木商を営なとりて徒のまゝた
このりの借家しておくり其秋を定る
うち善道家に能養父母の墓碑を営なら
菩提所浄蓮寺に建或家業いまゝに
まけとつとめて追々に銭貨を貯庶地り

このりなひととのことく申りおこなひ善事
政ゑ祭に世をのかし身退て夫婦隠居の
松操翁に称し茶道を楽み俳諧に遊ひて
無味の風雅を志るなひまゝ常に鰥寡孤
独の者となりけれは是をあはれみの隣むらの
篤行其人に親をとなへありしに以て申しに
無常迅速のことのかく嵐山の花に
このりの金を求めしかは蝶の夢みし覚
申しましてまつなき一粒をとらぬ椋に

猶もこのまゐるに宿縁ありやなしやとし
三田辺に住まるを同雅の甥某執筆す
俳門諸風子の詞をしるし追福乃
一集をつらねんと居士が侍りきとの結ぶまで
禿筆をとりてここにその所請く

嘉永壬子晩春　葛山

茶のゐみ

発起

かくまでは鳴や初雁の音まかせ　一庵居士

積にしる春の霧もおく　袖　笑市

まつ風のさらしきさよ夕月　解祥

見へつくしも寺に月田まかみ　松月

稲作にいそかるうちいたに稲の籾ま　亀松

市へ買ものしてつかひに宵月　石鳴

ゆめしくもえふきたつの気らしく　市
ふ経のりあくめる方へちくのつき　游
金柳も古風絵つくりの小袖さし　月
梅枝くらりてのくらもきり来　松
二三年庵もきらぬ江戸住居　鳴
ちよくふ万ふあふ揚料りの秋名　市
冬の月清利このえくろしとも　游
ちや　きくりしくとおるぬくのきみ　月

雲の原らとのしらふもきり持く　松
豊らりうちも馬のいかのく　鳴
絵りの菓子ちひろきさくもさめり　市
おらりもあらぬ庭の梅実　游
えりくと蝶の出逢ひる浮枝を　月
あくことふむらひかきあかりも繊　松
縫針小篠たきおりの筆の安き　鳴
里ふかくてふおのきへきぬ酒　市

降しし給ふちらつく小鰯白　許
蛇篭のおとにゆらるゝことの外　月
心なくなきよらしあるゝ庄屋殿　松
仏の■には名書きて拝しける　鳴
雲きりのたえて見ゆるに秋の月　市
簗のえ川さらに玉来つゝの家　許
虎狩のおとにせうある夜かなふて　月
蟇桶らにふ人のあそさき　松

様もおる所のたえぬ門にあまく　許
流り蝶にきく業なしとて　市
豆をやまぬの夕化粧のいそのま　許
つる雛の篇もこの節給ふやる　月
おくらしと言ひの粉の香しく　松
一声あたらなくぬるくひさ　鳴

老人に附随ひ

旅寝にありて

孝さましの甲斐ありし今日の旅衣　律覚

やとりしに出されて秋の
道芝のとくこゝへりしをうち招き
みるか記念とふありけり紫
むさしてもみよむらさきの姫君　笑市

一座老人らの喜よし星の
やまふさ小枝をさしのぼしつ
まつりよみやられ宗全り
秀まくのりたまた姉に

紫さらしやかくくるも来き笠の露　彩鋒
姥たしらはきへつさみしや星北く　布山
まはつきされとも声ぬ年向これ　亀松
はの新しや華澤らはあれなりる　松月
夜かきや河もさし跡につく草の茎　石崎

算市の傍より一座の評者を
云せ来るふ志らし梦有を写て
蜂に我魚のよ人よにに珠簾のよ

為山

夏の部

麦まくらぬるまかせ八こ秋かとまきて　梅室

我東さしてにおとなりふぬ帰　逢流

漁芽生ふあり霧しや浮きまは　尾村

あはれなりまにふしきしよりまとめ　尚白

あまきなりちきこゑ雲郷　四瑞

さつきらしやまふさみりて子規　佐之

影うつる縁をぬらすちやわんの湯こゝろ　五雀

門あけて年きのれらしら河絵　二丘

あけぼのやきりかんや鳳朝の若葉　芝角

絵きりしめくし落はまつり　味舎

影起しまつり見ありしきあたせられ　以葉

実をみなふ二階にかゝやきはさきけれ　葉山

きゝ廻あやまる縁とまりく利　遠之

うつくしき中に花鳥つゝまれ堂　好甫

ふくみきしれ嫁にもえゝりぬしゆ堂　島谷

卯の花や足もとへきさ星明り　碓花

うの花を見んよ雀のあきぬらし　黄山

人のけの絶へ夕つくゑらんのあり　五渡

風もしふるきよりの牡丹かな　鳳棲

三の千年のさしらぬ庭の春の花　卯月

菜をのりて殘に［illegible］んかな　波跡

姥らさした布を新綿の精より　抱儀

月高く新綿にて見や湯の［illegible］き　大英

［illegible］しくぬ新綿［illegible］ん綿かな　百丈

柴に来りて［illegible］菜漬来　垣了

［illegible］の［illegible］や川［illegible］　英泉

［illegible］汁［illegible］の菜の中の楓かな　東風

古澤や月［illegible］鴨　古峯

［illegible］の生れ所と［illegible］や［illegible］水鴨　丁知

［illegible］りの錦［illegible］利　西［illegible］

岩［illegible］や［illegible］鶴に月の［illegible］　抱泉

［illegible］の尾に［illegible］れ［illegible］や［illegible］の堀　杉壺

［illegible］　羽中

峰［illegible］の［illegible］高や埒の［illegible］　布菜

短夜やあけてしまひし本の末　仙華

うしろ影ハよそにうつろふ枝の水　綿中

明やすき夜をとらるゝやまくら元　五律

きつゝきのあまりて茶の花のちる日かな　清昌

さましれたしや一葉ふ眼のそとる　土明

また引や小田の中に見こほまさ　柳堤

秋のうへまつゝに挿しせしかすつゝけ　柳壺

たし雲にまへ秋を春ぬや宮ふ月　釜風

鳥おふも彼のかなき橋の水　桐古

ときゝけし葉をくゝふ立ちまきゑ　芦月

降きゝるもふとりてきえし月日　素外

あき秋の梅ゑとゝもくさへきさめ　祇緒

花咲おひ紅いて小紙に水　湛水

ここの仏ふみくぬるもありうのすく　桑堂

降つもる夕まて溶にながしけり　暦外

花ちるやこぼれて閑立橋のもと　採習

日の高しぬかるみつゝや葉の露　京むら

出舟来やいはぬ是糖の世の中　拾山

寺てし子や夏ふりこれて獄ゆけ　蓮交

篝火に仲ぬ一つ庭のあかゝり　松月

田中畔の中に撥賣に女房かな　幻舟

夜あらやきえつまとらう草の尾　逸瀾

鶉鳴けり鳥にも浪や夕あけし　如雲

扇つ山や雨ふりおちこち水　たよ

夏緑の森あかし枝や月の影　可笛

あさ緑やまつけむ松の影の松　大勝

夏緑や插苗根にて浪の音　芦友

ゆく嵐しきりにしける萩の手哉　梅谷

まへのけく松も茂りて野分哉　佳山

しら露も宇都にあまる稲の穂　交和

人ふるゝ扇にかへし川原かな　月底

月さしてあれやつゝくあふきかな　萬浪

涼まちて月にしのひや滝の下ハ　其武

ひとつ浪とともとし岸のあら清水哉　一紀

さしらんさまの名さしもたしそれ　竹良

さのしく浦はしぬく川かな　松風

ひと節あかく浪いとしはつゝれ　亭郎

川端ハあけ暮えや一夜の月　太乙

若の枝ともえのきゝ中くしふつ此月　渭萋

まことさや雲にこもれ芽の色　惟学

涼しさやいとまきゆる笠のこのけ　蕗珠

青ゆふるあしの立すくみかな　為雀

ふきかへして見えていふや涼し台　文雄

すゞしさ残るからあるや竿の島　月痴

川越しするの背にのるあゆさかれ　魯心

ふりふきその芝まてとは干出用かな　琢久

夕立に秋かも桐生の市るかな　百古

秋の部

名月や岩のこゝろにあそり坂　芹舎

名月のちからさく来て緑にさし　楳園

霧庵稿生

明月や何をいふても古畠　渓烏

毎ことのみの行ぬ月の清き部　拾雅

てりなしきさきしや夕月夜　一峯

竹の宮や薄ゆうちさ枕の露　雪篇

ふしの雲を腰にや霧晴り　蕉石

林あらしや夢をさますあきの声　立守

黒けりけり乃よの月さしや山の林　楓古

まつ林や音に気つる名古屋侍　貞秀

七夕や襟あらためて牛ぬく霧　錦城

河しきとれ飛をさらくのしもの川　米室

振先に草とらしも　あまの河　古叙

ふる里へ行秋ちかしや天の川　望雀

まさとらぬためりに訪をむかふなり　素山

二筋のすみだのあるをとりに曲　亀松

時をきく萩や稲つまさしる雲の中にて　双

いなつまの浪にうつる流をさた淋　均外

稲つまやさし花にふけし芭蕉　林香

紅葉やつゆに見ゆる竹のそよぎけり　桂西

あきかぜや小田縄なる北の方なり　逸葉

朝かぜや草にまとはる露の数　ちか子

稲きかぜの簡にもれぬ思ひのしれ　梶仙

あきこのかぜや垣根しかりとまる　夕雲

夕ぐれの空をみるより桐一葉　柏公

まつ虫や草の根きはにひとりなく　蓑石

涼しさの北牟にむくやちかき郷　布山

明方の月にもれぬや萩の上照り　一止

こぼれしと鵜あふさきや萩の露　よ紅女

草むらのきゝかね帯の浅き女郎花　藍園

早稲の穂にふくのきて稲の色る秋　梶支

さそはれしそよかぜあり雪や蕎麦の花　銀谷

照りしみをえんかけて月のし　竜得

よの花にしらぬあきの草の帰　未栽

岩つぐにかゝる菊月のとたる　琴洞

笠に入雨ありなゆきも堂の外　雪堂

拝し登るにも通りかゝる夕暮かな　菴磨

さまふかりしくえしきおのうかな　白羽

行先を尋ぬれと越すなる方の末　結之

まつ虫やさひしく鳴し声の陰　希淂

松むしやたまかて吹ハ風もなく　可庭

浪しふきやあまり浦の中はれまさるなる　杜凌

きりきりす臼の秋の月とあはぬに利　碑山

挿しよせて芒の中となりけり　萬翔

中々に路も歌もあるむしの声　年雄

草の露こほりつけなから心かな　可進

人のうへ嫌はれやすし草の露　見於

浪寄網の行まよふ葦かな初あし　素屋

秋風の戸はうらみつ伏屋かな　思成

あきのこゑや欄に出ぬ手の網うちかな　庶知

ありあけや色に植し楓の古木哉　瓢烏

ひと月の炭うるまきの行衛かな　卜早

山風の尾花にかくれて月夜かな　旭斎

八朔やしらきぬの露もおきそめし　千春

折しもつに秋をとりこむ庵の林　古蹊

鹿鳴の聲につゝむや野なかし　南之

河川の岸にさそはれぬきぬかしこの秋　素席

名月に相手の様ふきぬ[illegible]　石峰

是非しても[illegible]惜しきこの[illegible]　亭三

鶏をとらして[illegible]川[illegible]　千鶴

新秋をさそふや山田の[illegible]　梅舟

松ふく帝あそんて行よの秋ぞかの風　冬松
とく家ふつくらて縁やさらし酒　米巣
筆の毛や何のとゞまる椿の先　稲雯
きく咲やふかさ色の濃きくもなる　松良
秋ふるのとふ人今宵筆をも夜　松坡
月ふうくぬ蓮ふも縁ふやきく仏　石舟
井くのうも十日ふおりぬ筆の生所　一圭
椿ふくや中ちらさらさき末下ちる　山芳
おちる鮎をまり川のうけの棲犬こそ我　秀竹
若らしふ見ゆる明りや菊の花　里麦
遊六人の撰
まのとら縁承る扇つぬきは秋の名残　南崖

冬の部

ちのあんなり君はいさゝて身に雪の山　一具

冬山やとの縄ゝ雪まとゝ刹　北壺

やゝの戸や立まゝみにあかる雪の声　高峰

雪白とく柳や麓のこほれ志やう　山子

山中にて

井の雪きくさとみかゝや根の雪　義秀

かくて人ゝふに年もおしゝて鍬の源雪ゝれ　逆阿

根に入てしきまゝゝに中し雪しくれ　西馬

瑞ゝ子北小石つむきを初しくれ　蒼山

やよ風ハ椿しゝふ志ゝゝゝ時雨なり　一清

雪ふらぬ山をそれゝより志くれかれ　岳鳳

しくれゝや吹まき雪ふのゝそゝほ　梅五

叢らしふ時雨ゝ鍬や草の畑　万像

ぬくゝ翁の中小春ゝそゝり初ゝかり　大夢

ふとしてつゐかゞ雲も飛ぶ郷　淡霞

鮎生るき鯵の草なるものかな　小鋸

石も取りにあしきもや堂の擬　杜溪

舟には夜来家の人ちてこのしさゆる　志行

森に行にふ年縁まで家根なれ　越卯

常とても人をとふあさりなどめり　古山

走ろりなまるとも奇しかふ仲能　江月

さまふかしへのまこめ木れまり遂に家　星岬

為しの峯るなつのしに鯛市　梅通

追ふ縁をもとや小春の門の山　呂芭

まつ仲の月のもとあるに春なれ　煩水

座敷ふしかゞ銭あくさむに春式　弟店

筆のまふさむきやまとも梅の子なれ　禾明

珠義の手に人形しかける十秋なれ　双鳥

炭のかりしに縁義つくさとりの葉　泰丘

草の戸のふゆも見えてきたりける花　樹之

いさぬ時おもしろ紅ひし粉まち哉　宗屋

紫のしぼりまちく捨てむるる末花　紫黒

春きゆきまき自ら古さかしは帰りも　舎用

菜の花や□□跡見ぬ人にとこそまよ　不深

ふゆつこゝ侯ま行く〜りる梅　筆圃

きちんと務ろ吾赤川〜あり哉梅　嵐崗

ふらくなくつわるのあらや春椿　杏雪

うけ業にそろう中よし家この花　文宗

ありのしし跡や草むのさくら咲　旅山

其のに住ゆく行すありやあちら雪　乙紫

家自のまちやささ木の多かり花　蘭居

門たちく人かつく行かよまへの野　松什

世さあかつく雪の旅まじまく乗子哉　不老

新年の夜まてしあるさくつれ　白路

風ゆくに秋や浮石のさえ中たるき　波静

障中に横たへ見ゆる木の葉の風　九萬

しつまりし秋にたゝのちる萩木の花　五鈴

雲その色をきしやおちる紫に鏡　霞堂

おち葉ふたく箒の先を拾つてこの風　波同

杖つかぬ人のまたふきこの吹きこの風　日彩左

里ちかき夕くれ秋にみゆる柿紅葉　生也

暮に寄るなきまくる萩も露にゆかり　芝守

ともけて来る風の人絃や露にかゝ柳　正良

このもと川やあしも柳にかゝ堤　清芸

春は雪ふむれいとりし大根引　鳥津

宮の雪やそれと見えし後ハたちまちの風　未成

このんきくの屋もみえぬさうりに梅　小松

松似や嘆としくかをおくれたる　梅泉

さ條のいろさす垣の浅黄の水　雪年

若刀につく金人もむかふ蝶かとり　新吉

多けりとんしきしや羽衣さへ斗　梅程

世の波のさへしさしてほうき落雪　梅雄

えくりや波さこのくり白い行ふふり　春年

一もの花を中師走の柳緑の水　月之

るり見ておもく入いや先しく年の暮　子き

ゆくとしや若ふれける雲車の色　三省

りとしのあとのふみきし妻細　唐明

人のいそく界なるをむし年の市　奚化

としの尾やこのころおふきし万年春の宴　市丈

つきせ住藤しそとつき納や蓬萊の山　万古

春の部

きのふ人ゆきまさりけり堤の桃　為山

まちの灯のいつまでや草まくら　宗雅

ことしのはる萩の咲やきのふけ　こゝ女

菜の花や古井の水も涌にけり　素阿

こぞおしみやきのふのきぬ人の宿　馬暁

柳の陰かる人あやうき春の月　田洛堆

まことの人ぞ中々の花　竹山

曙やまことあらしく春のあと　翠霞

花き菜のあの尾屋根　布袖

さむしさにより茶のゆ　三友

岩にうしろ小家さゝの花　雲川

紫まての桜　華雄

いまなおうるや竹にかゝる風　糸魚

まさに咲く雲の桜にこぼるゝ春　丹嶺

さくのみや水の井人　呂岑

冬枯しや山をさしての物かたり　文器

江澤は芹ゝ緑しけりして石の如き　長瓢

手のさきにとゝくかはしる福寿草　摂山

茅葺の芽ふくハあり庭の庭　松濤

左義長やうちとけてきぬおりのまゝ　、漣山

これ程にけふとり枝ふりや梅の花　友甫

うめりさは妙のとゝきまかり袖袂　禾自

月さむし梅ハさし出る垣のかけ　清民

足もとのそゝきハ春しる月よかな　雪応

若柳や春の入り来る梅の枝　章波

まつさしハ春やく芽す柳この花　蕙琥

苗代の石にまたいとゝまる柳かな　式松

海面も春のさかゆるや辰の声　路沢

末石あたゝかに案しもせぬ柳かな　世貞

田家ハ春の数にもやさまこの花　雄飛

笑ふたつの也ちちや春の手まくら　笑市

青柳や籠さけゐ子の採つくし　似竜

黄昏や帰るさ見えし遊ひ雲　重貞

うくひすやまつにおもふ春の影(?)　江之

菜青や雉子のあゆみに霞みけり　[illegible]

きりしまや梨り咲いる里ぬるく(?)　葉里

雉子なくや芭より径き麦はたけ　松泉

花の松とくにおもへは春の雪　浮交

きさらぎとおもへはあとの春の雪　ぬ松

雪解や雨は古寺きも秋の影(?)　可大

春風や湖の魔(?)に浮しこのとめ　[illegible]雨

雲はれて雲をたなびく春の風　貴河

月のかげしらずあらぬ春この風(?)　桂翁

ふむるとはなくて志かしや春の子　桐渓

ちる花りつうつり春の草　然之

あちこちはこゝにも梅やつくし　竒武

ちく筏の上も根にしも川蕨　梅笠

汐風も来る里中にまきやつくり独活　素交

川ふちやあかりのうへの梅かさき　雲子

田をかへし中にも苗さへのこるつくまきかな　木鶏

雪のある空さへ行に木の芽萩　露栗

猫をりをりとりて見しに来る梅木かな　李悦

志ら魚や何れの色も銀眼に成る　柳波

人かけのさせいまに緑かゝりの鮎　古鷺

いさよのや岩にハ志うてまさ春の味　杜水

雪のあるゝ山より出して春の月　帝鯨

しかこのまはり鯛やく咲や梅つまき　其山

下りとくとく曙る星に志ちくしもの桂　嵐夕

酔うつりきまゝに梅さきそふられ　文海

露ちりて女にあらそふ雨の足　諺方

雲の宿り名残りの忘の今宵かな　素山

一夜さもみんせよ朝のきらきらとよみ　拙誅

行く春のあらそひ見や峯の月　蔦乃

春の菜やとちらく余りきまの松　孤舟

やまさとやさのしんつくるまだ雪　布石

引けがらに立てさゝの蝶の影　素柳

まるおもや飛ぶ手井度くあふる郎　月峯

菜の花や今桜にまくしなの寺　元吏

おしうよる手代らの縁やまるみさ子　解鮮

菜花らしのさしつや華の松ふう　素松

行ゆきのうれに見えて芸子のも　雀史

立遁鶏やあらしへのゆり京ちよへちり　梅口

山ふきや面の手枕よきゝり川家　思風

夕風の笹ふけハ鳴こゑもちつる那　素游

桃むしや云ふての蝉のみえく鳴　梅十

えへ田やかへさぬ田のうちまくかな　草一

梅実やたまきお絵し香る家紙の字　然芳

ふ寺ふるやるや橋の森くみる石井之　布山

石ゆるや蝶の立りて飛まるさ　娟牛

蝶とふや土や根あらし笠の紐　ふけめ

立つ津ゝよく見る雛の来くりふ風　中山

素麪の二めるかもしや手ぬうむ　筍琉

草とるやむのしをたれぬ宿のさま　並雄

中くしくあしの中の水や馬の鈴　古年

まんの水の南まさのらんし封来て実　之泉

存分のえくらの雪し落の土来　梅峨

おこたりし茅こもり屋の蚊帳にかれ　吳雪

露ちりしふるのあくの汁銭まくり　青好

赤あかくいふくつのましをおけの屋　莨表

附尾

志摩のきし水津女ふ柳これ　為山

清子志し市ハ東風のふきし込　笑市

まさ子餅丁ち小屋の窓ふあふる　立安

市からし小馬引くる来る　般詩

偉ふ枕あふまる月のゆまき　市

十一がの稲のとりいれ　山

御舞の御酒しらまする扇まねき　許
譜代の家老のまゐるにそつれて　宇
酒女よるの口おしまく人稼き　山
通りちらひり鳥をつれて稼　市
そらまても霧をあらんの大雪に　宇
またおしろき暮おもく糸粘の末　許
こゝろちとたまりし九月のいさよふて　市
ちかく包しつゝ秋の秋さむき　山

袷のあつく河魚の香かりの塩辛き　許
米新の川渡る西瓜頁寺に　宇
袖乞の主のをりの鳥居の扉　山
のかうまかくならしく緩り道　市
七色のこうくそとる経る鰻の味　宇
医者にもちあしぬ医者のともりの人　許
坂おもりのさのは大かさえあり　市
寄棲とりし出ての あと　山

ふきちらしたるに濁る絶え川　許
寺の朝ふけてしぐるゝに鐘　宗
衰へ根にさびしし茅尊芦の音　山
つくろう雪のこぼれしつゝあり　市
棲みし庵よ荒れし好む飯の集　宗
油筆の紋比目魚に長持　許
らし蓮華人ハ居つくぬ月のかけ　市
ぬ絹の川原にあまたむしの声　山

親父殿これにおはしの花盛り　許
松も大工のまねしてく合　宗
柏子木の喧嘩ハ峠の傳ゑけむ　山
所立まつの中くまへのまし　市
いしふうの花鞘の月ましいの水　宗
まうけらとこふなきしむ三月　許

王花花筭帝輯
東沱解辭校

鷗波書